

巻 頭 言

北海道草地研究会への提言

帯広畜産大学草地学科 村 上 馨

北海道草地研究会の発足は、昭和42年3月であるから今年で8年目を迎える。その発足にあたって、いささかなりとも関係したことを思い、また今日の発展を見るとき感慨深いものがある。この間、北海道農試は事務局を引き受け、研究会の発展のためになみなみならぬ尽力をかたむけた。ここに各位に対し心からなる敬意を払う次第です。

この会の設立準備は、1年前の昭和41年から始め再三の会合を持った。なんといっても一番論議されたのは「会の性格づけ」である。結局会員は研究、行政、普及、事業にたずさわるものを広く包含することにした。これは当時急激に拡大された一般の草地や公共草地などで造成管理、その他利用上に多くの問題をかかえていたので、少しでもこれに役立ちたいという願望が託されていたといつてよい。これらの趣旨は、研究発表会や現地検討会を通じてある程度は目的を達し得たように思われる。しかし今回事務局の十勝移転に伴い、本研究会は第2期に入ったと認識したい。そこで二、三の提言をしたいと思う。

(1) シンポジウムを取り入れる。

一般の草地に関する知識は、ようやく高い水準に達しつつある。しかし、最近酪農は国際情勢の変化に大きく影響を受けるようになった。指導者および農民は、これが対応におわれる有様である。当面する諸問題などを取り上げ、総合的に検討する場を持つことは有意義と考えられる。

(2) 大学の研究と農試の研究

農試の研究成果は、各農試の関係者が集まった農業試験会議で検討され、それぞれ指導参考と普及事項に区分されて、専門技術員や普及員を通じてその技術が農民に流した方がよいと思われるものがかなりあるが、これが検討の場がない。この研究会を利用するのも一方法である。

(3) 草地技術についての行政への提言

たとえばアルファルファの奨励のごとき、60数年前に北海道農試で奨励事項として取り上げて以来、再三にわたって普及に努めているが、未だ安定した栽培利用技術は確立されていない。本研究会はたとえばこのような問題など、ある課題について検討しあい、行政へ技術上の提言をすべきではないか。

(4) 日本草地学会との関連

日本草地学会は北海道支部会をまだ持っていない。本会がその役割を果しているのが現状である。前会員は北海道の牧草・草地その他飼料作物のかかえる研究・普及上の諸問題、たとえば品種の取り上げ方や地域性、草種混播など、その他について全国的な立場から積極的に発言すべきである。この意味では発表会の折に「小集会」をもつのも一方法である。進んで学会員の問題提起を望みたい。

(5) これを要するに、北海道草地研究会はなを暫くは、研究者や普及員等に対しては従来どおりの発表会を通じて知識と問題点の提供を行い、また行政と事業にたずさわるものには、主としてシンポジウムや小集会を通じて問題解決の方向を与えるという二面性を持つのがよいように思われる。